

東日本大震災から 2 年の節目を迎えて、私たちの活動を振り返る

Voices from the Field 代表 岡田憲夫

2011 年 3 月 11 日。東日本大震災。あれから 2 年が経過した。「2 年も」という感じもすれば、「2 年しか」経っていないようにも思える。被災された方はことさら複雑であるに相違ない。受け止め方も人によって様々であろう。「2 年しか経っていないのに、世の中では震災がもう風化し始めているのではないか」、「2 年も経っているのに復興の目途も立たない」などなど、新聞やメディアではそのような報道もされる今日この頃である。でも、現実は一概に言えない、ひとくくりにはできない、そして一人ひとりにとって、地域、地域によってさまざまな 730 日があったのではなかろうか。

震災の直後から「どこか小さな地域や集落地区に焦点を当ててその<生きる様(さま)>を伝えたい。そう思って取り組んだ方は数多くいた(はずである)。その多くは当たり前であるが、日本語で綴られた。でもそのままでは地球に住む数多くの人たちには残念ながら届かないであろう。では、それを英語に翻訳して世界に伝えてはどうか? そんな思いを共有する人たちが集まってこの小さなイニシアティブが震災後 2 カ月ほど後に立ち上がった。そして今、この活動に自発的に参加する多様な人たちが生まれてきている。「翻訳して世界に伝える」ということが、いかに困難なことかを痛感するようになっている。実際に現地に足を運び、その空気を体で感じなければ分からない何かがある。そういう思いで、実際に東北の被災地を訪問する企画も実行した。そこで生き抜こうとされている A さん、B さん、C さんの顔を拝見することで、翻訳する以前の問題として、現地をまるごと感じ取る意味と意義を私たちは改めて痛感したように思う。同時に、遠隔地に居てささやかでも震災から学び合う一つの可能性を模索するための、まったく新しいコミュニティづくりにつながるような感覚も抱いている。ささやかでもこれは世界につながっている。自身の生き方を見つめ直し、社会や世界を観る新しい視点を獲得する営みでもあろうか。そしてそれを多くの人たちと分かち合いたい。

最大の謝辞はレポートに出てくる現地の皆さまに捧げたい。皆さまから私たちがいろいろと教わり、力をいただいていたのである。不思議なことに私たちの生き方、世の中の見方に何かの変化が起こりつつある。

新しいタイプの共同研究として、これまで助成の対象としていただいた京都大学防災研究所にも謝辞を表します。

震災から 2 年。「被災者」と呼ばれた方々は、さまざまな苦闘の中から、それを乗り越え「日本の未来を築くフロンランナー」や「新しいマチづくりの実践者」として、復旧から、今度は復興へむけての第 1 ラウンドに差し掛かっておられるようにも思える。そうであるならば、この小さな活動も、可能な範囲で伴走者として、新たな呼吸合わせを模索するべきかもしれない。

今後とも皆さま方からの忌憚のないご意見・ご感想と、アドバイスをお待ちしています。